

ブルクハルト・ニーチエ 往復書簡

佐 野 利 勝

ニーチエとブルクハルト

ニーチエとブルクハルトの交渉は、一八六九年、ニーチエが二十五歳にしてバーゼル大學の古典言語學教授に就任したときに始まり、ニーチエが發病した一八八九年まで二十年間のながきにわたり續いてゐる。その間、二人の間柄がかなり親密であつたやうな印象をあたへるエピソードも二・三はあり、ニーチエは時々友人達への手紙のなかでブルクハルトと彼との親交について語つてゐる。しかし、その親密の度合には相當疑念を抱かすにはをれない。そして、先入見なく二人の關係を見る者は、それらのエピソードや手紙の言葉も、單にニーチエの側からの尊敬の念を表はすものであることに氣がつくのである。ニーチエはバーゼル時代にブルクハルトの「歴史

の研究について」と題する講義（彼の死後「世界的考察」なる題名で公にされたのはこれである）を聽講して非常に感動してをり、バーゼル大學を辭してイタリアに行つてからも、學生に依頼して「ギリシヤ文化史」のノートを送つてもらつてゐる。總てを輕蔑して、輕蔑しやめなかつたこの「大いなる侮蔑者」が、ただ一人このブルクハルトに對してだけは終生渝らぬ尊敬の念を抱いてゐたのは不思議である。「偶像の薄明」のなかで、ドイツの高等教育には大切なものが失はれてゐる、それは博識な野蠻人ではない正真正銘の教養を身につけた教育者だ、と述べてゐる個所で、ニーチエはかう言つてゐる。「例外中の例外を除いては。そのやうな全く稀有の例外の一人は、私の尊敬すべき友人、バーゼルのヤーコプ・ブルクハルトだ。バーゼルはヒューマニティーにおける

優位を先づ第一に彼にこそ負つてゐる。」さらに同じ本の「私が古人に負つてゐるもの」のところでは、「ギリシヤ人達のなかに沈潜した人、たとへば今日なほ生きてゐるギリシヤ文化の最もふかい理解者、パーゼルのヤーコブ・ブルクハルトのやうな人は、この仕事によつて何物かがなされたといふことを立ち所に見てとつた。ブルクハルトは件の現象について特別な一章を彼のヘギリシヤ文化史につけ加へた。」と言つてゐる。

ところが一方ブルクハルトは、ニーチェの非凡さを認めながらも、最初から彼のなかに自己とは相い容れないものを感じしてゐた。一八七二年になされた「我が國學校教育の將來」なるニーチェの講演を聞いたときのブルクハルトの批評も控え目ながら明瞭に拒絶的であつた。そして、彼の拒絶的な態度は時とともに強まつてゐるのである。兩者の關係がそれでもなほ永續し得たのは、専らニーチェの側からする渝らざる敬愛によつたものであらう。この間の事情は彼等のあひだに取り交はされた書簡が雄辯に物語つてゐる。われわれが問題にせねばならないのは、何が二人のあひだを距ててゐたのかといふことである。何故なら、この二人の對立は、もとより彼等

の個人的感情に根ざしてゐるのではなくて、それは、二つの世界觀の對立なのであつて、そこにはわれわれが現に生きてゐる現代の世界が當面してゐる問題が宿されてゐるからである。

二十六歳の年令的ひらきがあるにも拘らず。時代に對するブルクハルトとニーチェとの批判的意識には多分に共通するものがある。

ブルクハルトは若い頃、大要つきのやうに言つてゐる。

「悪いもの、偽りのものは曝露しなければならぬ。何故なら、今では總てが內的にも外的にも虚偽に満ちてをり、ただまやかしによつて露命をつないでゐるのだからだ。その罪はなかんづく、實は享樂生活への隠された欲望であるところの謂はゆるへ教養への、現代人の欲求の迷誤に歸せられねばならない。おお、この呪はれた普遍的教養……。これこそ、大衆に二三週間ごとに熱狂の新しい型をまるで砂糖かなにかのやうにぶつかぶせ、毎日々々御都合主義の思想、とりもなほさず妄想の殻をわれわれのまはりにぐると樂きあげるものなのだ。この妄想のなかで社會のあらゆる大きな階層はうごいて

ゐる。一人の人間が純粹に自身の衝動から自己を形成することがなほ可能であるといふやうなことは最早誰も問題にしない。時代の窮迫はあまり大きくて、ひとは人間を作らせることなどしてをれないのである。人々が求めているのは、謂はゆる現代生活なる怪物に萬人をどんな場合にも適合させるスタンブだ。参つてしまふことなくこの絶望的な方式に耐へる少數の變人は、内部的な虚偽からの解放へと努力することにより世間のもの笑ひの種となり、狩り立てられ、とどのつまりは反對の側へ傾いてしまふ。事態はかくの如くである。誰かヘラクレスの力を持つてゐる者があるとしても、アウギアス王の既にも喻へるべき不潔きはまるこの社會の掃除をすることは出来まい。人々に向つて山ほど押賣りされるところの何か誤つた熱狂を、皮肉や眞面目でもつて根本的につぶしてしまはうとする人は市民の王冠を受けるに値する。勿論、そのためには、にこやかな廣い度量が必要だ。といふのは、俗世間から貝殻追放を受けるのは必至であり、そしてわれわれは、アリストテレス同様、自分の名前を貝殻に書くほど自由な心をもつてゐねばならないから。」更に彼は、前の世紀は「啓蒙されたる時代」と呼

ばれたが、われわれの時代は「教養されたる時代」と呼ばれることだらう、——しかし、多くの教育機關をもつた大都市教育は、かつてアテネやフロレンスにおいてさうであつたやうに非凡なものを覺醒するのではなく、地位の奪ひ合をする虚飾だらけの凡庸人を養殖するだけだ、と慨嘆してゐる。

ニーチェの初期の著作のなかに、全くこれとよく似た發言の多いことは誰でもが知つてゐる。ニーチェとブルクハルトが一致して見てゐたのは、キリスト教的市民社會の內面的崩壊と、謂はゆる社會民主主義なる美名のもとにもたらされた精神生活の平板化と文化の死滅への潮流とであつた。すつと後（一八八六年）になつてもニーチェがブルクハルトに對して「私は貴方ほど、そんなに多くの前提を私と共有してゐる方を知りません、」と言つてゐるのも一應はもつともなのである。しかし、この點においても、ニーチェの文章に表れてゐる「何か根本的に新しいもの」への主觀主義的要求と、ブルクハルトのフアナティズムに對する嫌惡、「にこやかな廣い度量」との間には、かなりの距りのあることを見落すことは出来ないものである。それでも不幸なニーチェは、二十六歳年長

のこの「高邁なる智者」(ニーチェのブルクハルトに對する尊敬の言葉)のなかに、自己と等質的な師友を見てゐた……いや、見てゐると信じようとしてゐたのである。何故なら、ブルクハルトは早くからこの若い友人のなかに後年の「一切價値の轉換者」への萌芽を感じし、つねに彼とのあひだに用心深い距離を置いてゐたのであつて、そのことは友情に飢えたニーチェを最後まで苦しめてゐただからである。

しかし、二人のあひだに終始超えがたい溝となつて横はつてゐたのは、歴史と傳統に對する決定的な態度の相違であつた。だから、われわれは少しくこの點に立ち入つてみる必要がある。

ニーチェの歴史に對する態度をうかがふのに便利な著書がある。言ふまでもなく「生に對する歴史の利と害」である。先づその論旨を要約してみよう。

人間が他の動物とことなる所以は、昨日もなければ今日もなく、一瞬々々が忘却である禽獸とちがひ、過去を背負いながら過去から身をふり切つて未來にはたぎ出すといふこと、つまり歴史をもつてゐるといふことだ。

歴史がなければわれわれは人間ではなくなるだらう。だからニーチェは歴史が人間に奉仕する様式を考察して、次の三つに分類してゐる。第一は記念碑の様式である。歴史は行動的戰鬪的な者が、現在の苦しい闘争において自己を鼓舞激勵するために過去の記念碑的なものを回想することにより生に奉仕してゐる。第二に、歴史は、過去から存續してきたものが、自己がそこから生じた條件であり故郷であるといふ確信を與へることにより生に奉仕してゐる。何故なら、このやうにしてわれわれは、自己が運命の恣意によつて全く偶然に生じたのではないといふ信念を得るからである。この様式は保存し畏敬する人の様式であつて、ニーチェはこれを背重的様式と呼んでゐる。第三に、歴史の批判の様式がなければならない。といふのは、われわれが以前の世代の相續人であるからには、われわれはまた過去の迷誤と犯罪との相續人でもあるからである。だから、未來に向つて生きんがためには過去を法廷に立たせ、審問し宣告をくだす能力がなければならぬ。

尤も、第一の様式の場合は、人間が過去の見事な成果にのみ目を奪はれて、その原因に注目することを忘るお

それがあり、第二の場合には、あらゆる過去のものが同様に畏敬すべきもののやうに思はれ、それに反して一切の新しいもの、生成しつつあるものが敵視されるにいたる惧れがある。また、第三の場合については、過度の批判により維持さるべきものの限度が見失はれる危険性がある。しかし、とにかく歴史は「生に奉仕する」といふ限界を與へられることによつて健全であつたのである。ところで、歴史が生に奉仕することをやめ、一人立ちの科學となつて、しかも歴史が過剰になる時にはどうなるか。空腹を覺えもしないのに過度に攝取される知識は人間の健康を害せずにはおかぬ。そんな知識は裝飾的に人間の外部にペタペタとはりつけられるだけで、血となり肉となつて外部へはたらし出す力とはならないのである。現代の教養はまつたく歴史的知識教養になりさがつてゐる。何故か？歴史が生に奉仕することをやめ、過度にわれわれのなかに侵入して來たからに他ならない。

このやうな歴史の過剰に對してニーチェは斷然生の優位を主張する。「ただ現在の最高の力によつてのみ君等は過去を解明することを許されるのだ。ただ君等の最も高貴な性情の強烈な緊張によつてのみ、君等は過去のも

ののうち何が知るに値し保存するに値するか、そして偉大であるかを知るであらう。」「今こそ知るべきである。

ただ、未來を築く人のみが過去を裁く權利をもつのだ。君等が前方を見つめ、偉大なる目標を設定することにより、君等は同時に、いま君等の現在を荒廢し君等のあらゆる安靜を、あらゆる平和な成長と成熟とをほとんど不可能にしてゐるところのあの過剰な分析衝動を制することが出来るのだ。君等のまはりに偉いなる廣範な、希望と希望にみちた努力との垣をめぐらせよ。未來がそれに適合すべき一つの像を君達自身のなかに形作れ。そしてエビゴーンであるといふ迷信を忘れてしまへ。」

ニーチェをしてこのやうな大膽な主張をなさしめたのは、先づ第一に歴史に對する彼の根本的な批判であつた。歴史は時間を超越した客觀的眞理としては成り立ちえない。過去が何であるかは他ならぬわれわれの現代が決定するのだ。ニーチェの憤りは生の根本を忘れた歴史學に向けられてゐたのである。そのやうな歴史學は生の健康を阻害し、遂には歴史そのものを駄目にするのではないか。

ニーチェは更に一步を進めて、かかる近代の歴史主義

發生の根源を衝かうとする。それは、人類の老年といふ意識、「われわれは、かつては若く潑刺としてゐた人類のエピゴーンであり末世の人だ」といふ意識である。

「だから、ほかならぬ可成り高度に發達した歴史的な人々のなかに、しばしば普遍的な懷疑に陥つた次のやうな陰鬱な意識が見うけられる。民族の教育が今日のごとくこんなにまで一方的に歴史的でなければならぬと信ずるのは何といふ不合理、何といふ迷信であらう。最も強力な、しかも行動と業績において強力であつた民族は、そんなふうには生きなかつたし、また彼等の青年をそのやうには養育しなかつたではないか。しかし、われわれにはそのやうな不合理、そのやうな迷信が似つかはしいのだ——とその懷疑的な抗議は言ふ——われわれこの末世の者には。もつと力強く快活であつた種族の色褪せたこの最後の末裔には。……。歴史的な教養は事實一種の生れつきの半白の髪であつて、幼年の頃からその半白の兆候になつてゐる者は、本能的に人類の老年といふ信念に到達しなければならぬであらう。そして、老年には老人らしい仕事に似つかはしい。すなはち、追憶を通して回顧し、勘定に目を通し、決算し、ありしものに

慰めを求めること、つまり歴史的教養が。」そして、かかる老年の意識の正體は何か。

「寧ろ、すでに凋落しつつある人類といふこの痲痺的な信仰のなかに、中世から繼承されたキリスト教神學の觀念の迷蒙が、あの世界終焉近きにありといふ思想、恟恟として期待されたる最後の審判の思想が、ひそんでゐるのではあるまいか。」

ニーチエが挾挾したのは、近代の歴史意識の底流をなしてゐるキリスト教的要素だつたのである。彼によれば、殊にドイツにおいてはヘーゲルの歴史哲學に媒介されて、近代の歴史意識は表面は進歩の意識を装ひながらも、實は没落の意識だといふのである。

ここまで問題を押しつめて來て、近代の歴史主義がそれ自身一個の歴史的現象であることを觀破するならば、解決の道が思ひうかぶのである。われわれは歴史の流れを溯り、ヨーロッパの歴史の源である古代ギリシヤにまで歸つて考へても、どうして悪いことがあらう。「そこには然しながら、本質的に非歴史的な教養の現實を、そして、それにも拘らず、いや恐らくはそれ故にこそ言語に絶する豐饒な生に溢れた教養の現實を見出すのであ

る。」われわれがエピソードであるとしても、このやうな種族のエピソードであるのなら、將來に對する希望を捨てるのはまだ早い。實際、われわれ末世の者のなかにも青春は恐らくまだ死滅してはゐないであらう。近代はふたたび青春を呼び戻すことが出来るかも知れない。しかし、それは容易な業ではない。若い頃のニーチェにおいては、この青春恢復の方策は二つに分裂してゐる。即ち、非歴史的なものと、超歴史的なものである。

非歴史的なるものとは、歴史的なるものが追憶であるのに對して、忘却しうる能力と技術、及び自己を過剰な歴史の荒野にさまよひ出させないで生に適應した有限な視野のなかに限界づける能力と技術とである。超歴史的なものとは何であるか。これについては、ニーチェは次のやうに考へてゐる。一人の女性、或ひは偉大な思想にたいして激しい情熱を燃してゐる男を想像してみよう。

彼は他事に對しては無理解、過去に對しては忘恩、危險に對してさへ盲目である。そこにあるのは生の渦巻だけである。しかし、あらゆる發明発見、あらゆる偉大な戦争の勝利、偉大な藝術作品は、このやうな徹底的な非歴史的狀態においてのみ生れ出るのである。あらゆる偉大

なる歴史的出來事はこのやうな非歴史的雰圍氣からのみ生ずるといふことを認識する者は、超歴史的立場にまで自己を高めることが出来るであらう。かういふ人に向ひ君は君が生きてきた過去の十年なり二十年なりをもう一度生きてみようと思ふかどうかと問ふならば、彼は即座に「否、」と答へるだらう。それは、彼が今までよりもよりよき將來を期待してゐるからではない。彼が「否、」と答へるのは、彼が時間的「過程」のなかに幸福を求めてはをらず、彼にとつては世界があらゆる瞬間において完成されてをり終極に達してゐるからなのである。彼は歴史の世界を見るにあたつては、過去のものゝと現在のものゝとは同一であり同一物である、即ち、如何に千差萬別であらうとも類型的に同じであり、不滅の類型の完全な存在として不變の價值と永遠に同一なる意味とをもつて靜止してゐる形態であると考へてゐるのだ。このやうな生命の燃焼の瞬間は、他ならぬ後年のツアラツストラにおけるニーチェがそこに永劫回歸を見てゐた崇高な瞬間であつた。

本來ツアラツストラの問題は、如何にして歴史的人間が超歴史的になりうるか、そして人生において各瞬間に

永遠性を與へうるか、つまり、如何にして時間を超越することが出来るか、といふことであつた。従つて、超人ツアラツストラにとつては「かつては斷片であり、謎であり、怖るべき偶然であつたもの」が、完全な統體として存在するに至るのである。かくてこそ人間は、失はれた世界と失はれた幸福とを恢復する。ところが、それは歴史的知識の過剰に悩んでゐる人間には到底得らるべきものではない。ツアラツストラは總てが等しく回歸することを教へることにより、人間が「永遠の今」のうへに腰を下し、あらゆる「かくあつた」ものから解放される自由をふたたび與へようとする。そして、そのための前提條件が、歴史的時間の忘却であつたのだ。「生に對する歴史の利と害」では、ニーチェはまだ過去全般からの解放を主張してはゐないが、このやうな觀點から見て、ツアラツストラの前段階をなすものと解さるべきものであつた。

このやうなニーチェの大膽な態度に對して、ブルクハルトが歴史といふものをどう見てゐたかを検討してみるならば、われわれは、ブルクハルトがニーチェの倦まざ

る呼びかけに對して、何故にあのやうな謙遜な、しかし多分に皮肉なものを含んだ拒絶の態度をもつて臨んだのかを理解することが出来る。

先づブルクハルトの資料の取扱ひ方から始めよう。

歴史の分野でも非常な専門化がおこなはれたために、極めて小さな事實に關しても優に一冊の書物が著はされるに至つてゐる。歴史研究は、從來の「歴史」なる概念をはるかに超えて、巨大なものになつてしまつたのであるから、完全な期するには非常に勤勉で且つ才能に恵まれた千人もの人がかかつてもまだ足りないであらう。歴史研究を始めるにあたり、われわれの絶望を惹き起しかねない光景である。こんな状態に當面して、われわれはどのやうに資料を處理すればよいのであらうか。

ブルクハルトはかう言つてゐる。

「對象を選択するに際して主觀的な恣意が大いにはたらくことは、どうしても避けうるものではない。われわれはへ非科學的であり、全く方法と名のつくものを、少くとも他の部門の人々が持つてゐるやうな方法を所有してはゐないのである。われわれは主觀的に處理しなが

らも、比較的重要なものを目指さうと努めつつ研究することにより、この講義を獨力で築きあげたのであるが、その同じ研究から、別の人はある種の別な選擇と整頓とは言ふに及ばず、いろいろと別な成果を納めてゐることであらう。もつと豊かな研究からはもつと正しい、そしてもつと偉大な記述が生れるであらう。」

つまり、彼にとつて歴史の研究は、謂はゆる科學であつたのではなく、「個人的に興味のもてる過去のもの」を我がものにするのが主眼であつて、このことにより始めから健康に限界づけられてゐたのである。だから、歴史による生命の殘害を恐れる必要もなく、意を安んじて研究に没頭出来たのである。

ブルクハルトの著書や講義はすべて、彼が繰り返し強調してゐるやうに、専門の學者を養成することを目標にしたり、専門的な意味での歴史研究への指導を與へようとしたものではなく、歴史的なものの研究を對象としてゐる。そして、そのやうな過去のものに關する個々の知識は、つねに「それが特殊の領域からの知識、または思想として有つてゐる特殊の價值と並んで、それは變化する人間精神の或る特定の時期の知識としての普遍的な、

また歴史的な價值を有してゐるのであり、正しい聯關に置かれるならば人間精神の連續性と恒常性との證據を與へるものなのである。」何故なら、「精神は變化するものではあるが、無常なものではないからである。」だから彼は又かうも言ふのである。「われわれの目的のためには選り抜きの資料を資料そのものとして讀むことのみが問題とならねばならない。神學者や法學者や言語學者は、遠く距つた時代の個々の著作を研究する。それでよろしいのであるが、その内容が狹義における彼の専門分野に關聯する限りにおいては、同時に又、歴史的なる意味において、即ち人間精神の發展の個々の段階の證據として研究するやうにしてもらひたいのである。」

眞に學びたいと思ふ人、即ち精神的に豊になりたいと思ふ人にとつては、たつた一つのうまく選擇された資料は、學習者が自分の精神の單純な機能によつて個別的なものの中に普遍的なものを發見し且つ感得することによつて、無限に多數の資料のいはば代りをなすことも出来るのである。」

ブルクハルトにとつては、見渡しがたい資料の山から、人間精神の永遠性と普遍性とに關係のあるほんの僅

かなものでも探し出すことが問題であつた。無益なものは惜し氣もなく捨てられよいのである。従つて、ニーチェのやうに、歴史的知識の過剰を攻撃する必要もなかつたのだ。いや、過去を忘れ去らないこと、歴史の連続性——これをブルクハルトは「歴史一般の偉大なる總體的課題の主要部分」と呼んでゐる——を保つことの必要性は、彼にとり抜きがたい確信であつた。ブルクハルトは、フランス革命による西歐の傳統の斷絶が恐るべき危機を人類のうへにもたらすだらうことを豫見してゐた。だから、個人の主觀のなかにある希はしき未來像を建設するために過去のことを破壊するのではなくて、追憶により「歴史の連續性」を保持しようと努めることは、歴史の教養を身につけた者の使命だと固く信じてゐたのである。

ところで、歴史には變化性と並んで多元性があり、「歴史的な生」は千變萬化、さまざまの様相を帯びて現はれてくる。「かかるすべてに對して、われわれは或る特定の時代の人間として受身的な貢税を支拂ふことは避けられないのであるが、われわれはまた同時に觀照的に臨まねばならない。」つまり、歴史の現象をさきに述べた歴史

の精神的側面から把握することがわれわれの任務なのである。そしてまた、「われわれの精神は天性により、この課題に對する高度の能力を賦與されてゐる。精神とはあらゆる時間的なものを理念的に把握する力である。精神は理念的性質のものであるが、外面的な形における物事はさうではない。

我々の眼は太陽を宿してゐる。

さもなくば眼は太陽を見ないであらう。

精神は、それが経過してきた種々の地上の時代に對する記憶を、その所有に變じなくてはならない。個々の人間の生活におけるのと同様に、かつては歡喜であり苦惱であつたものが、今や認識とならねばならないのである。

ここにおいて「歴史は生の教師なり」といふ言葉は、より高いと同時により謙虚な意味を獲得することになる。われわれは經驗によつて（他の何時かのために）例口になるのではなくて、寧ろ（永久的に）聰明にならうと欲するものである。」

歴史研究の使命は、諸々の現象のなかに現はれてゐる普遍的な人間精神を、別言すれば「永遠人間的」なるも

のを共感的に把握することにより聰明になることであった。歴史は生を害するどころか「生の教師」なのである。しかし、變轉して止まない歴史に對して觀照の態度で臨むには、われわれは何處かの不動の一點に立たなければならぬ。ニーチェはそのために超人ツアラッストラを立てることにより、歴史の外に飛躍したのであつたが、ブルクハルトはこの一點を歴史の眞只中において捉へてゐる。

「われわれの出發點は、ただ一つ不動であり、又われわれにとつて可能な中心點、即ち忍従し、努力し、行爲する人間——現在においてさうであり、過去においてもさうであつたし、未來においてもさうであるだらう人間である。従つてわれわれの考察はいくらか病理學的であるだらう。」

ヨエルが指摘したやうに「忍従し、努力し、行爲する人間」なる形容詞に現はれた彼のベシズムは、ここでは不問に附さう。

われわれはもう少しブルクハルトの歴史研究の態度を追はねばならない。

ブルクハルトは學問的體系を樹立することを始めから

拒絶してゐる。従つて、彼の歴史研究は歴史哲學とは全く違つた行き方をしめさなければならぬ。ここでもわれわれは彼自身の言葉を聽かう。「歴史哲學は過去を、われわれ發展したものに對する對立物であり前段階をなすものであるとして考察する。それに反して、われわれが考察するのは、われわれの内部に共感を呼びおこし、又われわれに理解しうるものとしての繰返すもの、恒常なもの、典型的なものである。」ニーチェが現在の瞬間のなかに永遠を見、永劫に等しく回歸するものを説く時、ブルクハルトこそはニーチェの要求にかなつた當時唯一の歴史家であつたと言はなければならぬ。ブルクハルトの言ふ「文化史」とは、單に文化の歴史といふのではなく、かういふ視點から見られた人間精神の把握を指すものであつたのである。彼は言つてゐる、「文化史は過去の人類の内部へむかつてゆき、過去の人類が如何にあつたか、如何に欲し且つ如何に考へたか、又如何に見、かつ爲し能ふたかを告げ知らせる。文化史がかくして恒常なるものに到達すると、つひにはこの恒常なるものは瞬間的なものよりも偉大であり重要であると思はれて來るし、或る特性は或る行爲よりも偉大であり教

ふるところ多いやうに思はれて来る。何故なら行爲とは、その行爲をつねにあらたに創り出すことの出来る當該人間の内的能力の個々の表現にすぎないからである。だから意欲され計畫されたことは事件と同様に重要であり、理念は何らかの行爲と同様に重要なのである。」また、「文化史が對象とするやうな普遍的な事實は、多分、平均して、特殊な事實よりも重要であらうし、繰返すものは一回限りのものより重要であるだらう。」しかし、かういふ普遍的なものを個々の歴史的現象のなかに視るためには大變な修鍊が必要である。先づ第一に、個人的主觀的なものにより認識の眼を曇らされないことである。われわれの身に近い歴史が興味深く感ぜられるのも、實は、歴史そのものが面白いのではなく、われわれが利害の感情を昂ぶらせてゐるからに他ならない。ブルクハルトが、彼の熱愛したバーゼルやスイスの歴史に手を染めなかつた理由もここにあつた。われわれの眼前には未來といふ暗黒の世界がよこたはつてゐる。そして、われわれの運命は過去から無數の糸をなして未知の未來へと走つてゐるのであるから、そこへ自己の願望像を持ち込まうとするのは、われわれ弱い人間の本能であらう。

う。だから彼は認識を純粹に保てと繰返し學生に強調してゐるのである。來るべき世界のなかに強烈な主觀的な願望像を持ち込んだニーチエの立場は、彼の最もとらないうところであつた。彼は言つてゐる、「若しも歴史が何らかの方法で人生の大いなる、また困難なる謎をわづかでも解明すべくわれわれに助力すべきものであるのなら、われわれは再び個人的乃至時代的な不安の領域から脱出して、われわれの眼がすぐさま利己心のために曇らされることのない地帯へと歸らねばならない。もつと充分な距離を置いて、もつと落着いて觀察するならば、恐らくはわれわれの地上の營みの眞實な狀態を認識する端緒を把握することが出来るであらう。」

ブルクハルトの「世界史的考察」は次の言葉で終つてゐるのである。

「かかる時代に、といふのは、

われわれがそのなかに育つて來た三十年間のうはべだけの平和がとつくに過ぎ去つてをり、一連のあらたな戦争が接近しつつあるを思はしめるとき、

最大の文化的諸民族がその政治的形態において動搖し變動しはじめてゐるとき、また

教養と交通の普及が苦惱と焦燥とをも目に見えて急速に
彌漫させつつあるとき、さらに

社會的諸制度が現世のうごきにより全くの不安に晒され
てゐるとき——未解決のまま山積されてゐる其他の多く
の危機は考慮のそとにおくとしても——

かかる時代に、

このやうなあらゆる現象のうへに飛翔しながら而もこれ
等と結合し、新しい住家を建設するところの人類の精神
を認識しつつ追求するのは、何といふ驚くべき光景であ
らう。勿論、同時代の世俗的な人々にはうつてつけのもの
ではない。しかし、このことについてのいくらかの豫
感を有する者は、幸不幸を全く忘れてこの認識への純粹
な憧憬にのみ生き續けてゆくであらう。」

ブルクハルトとニーチェの相違は、以上でいくらかで
も明瞭になつたかと思ふ。來るべき時代のためにあらゆる
既存のものに敵對したニーチェは、過去を超克せんと
して「善惡の彼岸」に立つた。しかし、その立場は當然
同時にまた「人間であること、従つて、歴史のなかにあ
ること」の彼岸にあつたのであつて、彼の絶望的跳躍は

實は「人間であること」からの身投げであつたかも知れ
ないのである。過去は本質的に一種の亡靈である、——

とオルテルガは言つてゐる——過去は無視されれば、必
ず亡靈のごとく歸來してわれわれの首をしめる、過去を
超克する途はただ一つ、過去と仲よく手をつないで歩く
ことだ。實事、ニーチェも完全に歴史を超えてゐる

であらうか。あらゆる既存のものを破壊しようとしたニ
ーチェも、彼の未來像を古代のギリシヤに見てゐたので
はなかつたか。そして、超人ツアラウストラは歴史を超
え得たとしても、超人ならぬニーチェ自身の生涯はあま
りに人間的であつたと言はねばならない。尤も、十九世
紀はあまりと言へばあまりにも樂觀主義的な時代であつ
て、淺薄な進歩の原理を信じ、時代が情勢の趣くままに
推移し行くことに何らの疑念をもさしはさまなかつたの
である。つまり、眞の文化は死滅しつつあつたのだ。危
惧すべき文化の角質化を爆破するには、ニーチェの出現
が必要だつたのである。ニーチェは己が使命を自覺して
ゐた。彼は「火」であり「ダイナマイト」であつた。し
かし、何時の場合にも、破壊は直ちに建設につながるも
のではない。われわれは今日、ブルクハルトが時代に絶

望しながらも明朗な氣持を失はず、「大して御世辭も言はず、かと言つて文句もつけず、」黙々として傳統の糸を紡ぎ續けようとした努力に脱帽すべき時期に來てゐるのではないか。何故なら、ブルクハルトは單に「後方ばかり向いてゐる人」であつたのではなく、同時に「完全な崩壞の淵に臨んでゐるやうな一つの時代の只中にありながら、明朗で曇りなき精神を代辯することを念頭に置き絶えず前方を視てゐた」のだからである。

〔附記、以上の小論の過半は Karl Löwith の名著 „Jakob Burckhardt“ (1936) 及び Alfred v. Martin: Nietzsche und Burckhardt (1947) に負つてゐる。〕

往復書簡

一

ブルクハルトからニーチェへ

バーゼル、一八七四年二月二十五日。

心から尊敬する同僚ニーチェ様、

「季節はづれの考察」の新しい御勞作お送り下され、心から御禮申し上げます。この驚くばかり内容豊富な書物をざつと一讀しまして、私はさし當りただ二つの事をお答へ出来るのみであります。この御勞作は丹念慎重に讀まねければならないものですから、實は、私などこれに關してとやかく申す資格はありませんが、内容が私のやうな者にとつてあまりに密接な關係にありますので、つゝ早速何か言つてみたい氣持になります。

先づ第一に、私の哀れな頭腦は、貴方がやつてのけられるやうに、歴史學の最後の根據や目標及びその效用について、臆氣ながらも反省してみる能力は未だかつてありませんでした。しかし、教師として、又大學教授として、私は次のやうに申してもよいかと思ひます。即ち、私は、人々が大げさに世界史なる概念のもとに理解してゐるやうなもののために歴史を教へたことは決してありません。私はそれを主として基礎教養科目として教へてきたのであります。萬事が宙に浮いてしまつてはならないとすれば、人々が彼等の各種の研究を進めて行くために缺くことの出來ぬ足場を提供せねばならなかつた

のであります。私は人々が過去のもの——それが如何なる種類のものであれ——自分で我が物とするやうに指導し、そして少くともそのやうな努力が彼等にとつて厭なものでないやうにするよう最善を盡してきたのであります。私は彼等が獨力で果實を收穫することが出来るやうに希望するのであります。又、狹義の學者や生徒を養成しようなど、考へたこともありません。私が希望したのはただ、一人々々の聽講者が、「われわれは個人的に興味のもてる過去の物を自分自身で物にすることが出来るし、又そうしてもよいのだ。そしてそこには何か喜ばしい物がありうるのだ、」といふ確信と希望を抱くやうになることであります。そのやうな努力はディレクタントイズムに導くものだとして人々から非難を受けるだらうことは私もよく承知してをりますが、この點では一つの慰めをもつてゐます。私のやうに歳をとると、われわれが現實に屬してゐる教育機關のためにだけでも授業のための一つの規準をおぼよそながら發見すれば天に感謝すべきでありませう。

こんなことは、心から尊敬する同僚ニイチエ様、貴方が私から期待してをられる辯明から程遠いものでせう。

これは、私が今まで希望し努力して來たことについてのざつとした回想にすぎないのであります。なほ、貴方の御好意ある二九頁の引用は、私には少しばかり心配になります。私はあの個所を讀んだとき、このやうな言ひまはしは結局のところ全くは私のものでなくて、シュナーゼもかつてこんなふうな表現を用ひたのではなかつたかといふやうな氣がしました。ですから誰も私にその責をきせないやうに希ふ次第です。

貴方は、歴史的知識と能力及び存在とのあひだの敵對關係、更には集積的知識の法外な堆積一般と時代の物質主義的衝動とのあひだの敵對關係など、眞に悲劇的な矛盾を眼前につきつけなさつたのですから、この本では多くの讀者を感動させられることでせう。

御厚情に對し更めて心から御禮申上げ、渝らざる尊敬の意を表する者であります。

貴方の恭順なる

ヤーコプ・ブルクハルト。

(1) これは「生に對する歴史の利と害」の贈呈に對する禮狀である。

- (2) デイレツタンティズムについては彼は次のやうに考へる。デイレツタントなる言葉は藝術方面から惡まれてゐるが、藝術は本來完全性を前提として居るのだから、巨匠になるのでなければ問題にならない。然し學問に於ては、いづれかの専門分野に於て巨匠でなければならぬのは無論であるが、それだけでは不充分である。認識を豊にし、着眼點を豊富にするため、我々はデイレツタントでなければならぬ。さうでないなら、我々は専門外の領域では全く無知で惡くすれば野蠻人になつてしまふ。これがブルクハルトのヒューマニストらしい考へ方である。
- (3) "... zu einem „wundersamen Weiterklingen des neuen Satienspiels,“ wie Jakob Burckhardt sagt. だがこれだけの引用である。
- (4) 同時代の歴史家。

二

ブルクハルトからニーチェへ

火曜（一八七四年八月十八日）

尊敬する同僚のニーチェ様、

ホツツ君から承はる所によれば、貴方は彼の試験のために次の土曜か月曜をあてておいでとのことだ。私にはどちらでも結構ですが、ただ試験が月曜になるやうでしたら、私の試験のために、二時からの時間を頂戴致したいと存じます。

心からの尊敬をこめて

貴方のJ・ブルクハルト

- (1) バーゼル大學の學生なのであらう。

三

ブルクハルトからニーチェへ⁽¹⁾

バーゼル、一八七九年四月五日。

貴方からの御葉書を落掌しましたのは、丁度私が、ちとばかりのんびりと氣保養をしようと思ひまして、二

日間の小旅行に出かけやうとしてゐた時でした。貴方は、敬愛する友人ニーチェ様、そんなにおわるいといふのに！ ジュネーヴの季候が少くともいくらかでもよい影響を貴方の健康に及ぼしてくれることを心からお祈り致します。萬一東北旋風（ビバシノール）が吹くやうなら、湖の東よりの片隅に避難なさるやう。

「人間的なもの」のための追加（3）はシュマイツナー氏の手から正しく落掌致しました。そして拾ひ読みしながら通読し、今更のやうに貴方の精神の自由な豊富さに吃驚致してをります。私は御承知のごとく、本來の思想の神殿には踏み込んだことがありません。私は終生、最もひろい意味での形象的なるものが支配してゐる構内の内苑や玄關で楽しんできました。ところで、貴方の御本では、丁度私のやうなそんな怠慢な巡禮者のためにあらゆる面から十二分の配慮がなされてあります。しかし私のついて行けないところでは、貴方が目も眩む岩角を確實な足どりで逍遙なさる有様を望見して、恐怖と満足の混じつたある種の感を抱くのであります。そして貴方が谷底や遙かな彼方に見てをられるに違いない光景を心に描いてみようと努めるのであります。

ラ・ロシュフーコーやラブリュイエールやヴォーヴナ（1）ルグも、若しかして黄泉で貴方の本を手にするやうなことがあれば、どんなに感ずることせう。就中老モンテニーニは何と言ふでせうか。さしあたり、私は貴方の御本のなかに、例へばラ・ロシュフーコーがまじめに羨望するだらうやうな句を幾つも知つてゐます。

御厚情に心から感謝し、併せて御健康を祈念致します。

貴方の

J・ブルクハルト

「この手紙の裏にはニーチェの手で次のやうに記されてある。

「友よ、ここに私が高く評價し、貴方に約束した二通の手紙がある。私はそれを偶然に見つけ、早速お送りする。明日ともなれば私はそれを偶然に又なくしてしまふだらう。」
F・N

（1）「人間的な餘りに人間的なもの」の送付に對する禮狀。

（2）Bise noire 地方的な季節風ではないかと思はれる。

(3) 「人間なもの」の第二部のこと。

四

ブルクハルトからニーチェへ⁽¹⁾

バーゼル、一八八一年七月二十日。

尊敬する友人ニーチェ様

貴方の恐ろしく内容豊かな御本を、私は今なほざつと目をとほし、あちこち拾ひ読みしてゐる次第です。御著のなかには、貴方も御推察なさつてをられるやうに、私の氣質にあはない個所がすくなくありません。しかし私の氣質が何もう唯一正しいものである必要もないわけです。私にとり何を措いても特に有難いのは（既に今までの御著、就中「人間的なもの」などでもさうなのですから）貴方がそこから古代の本質を見渡しておいでになる大膽な遠景^{ベルゲン・ハイフ}です。二三の點については私も豫感し始めてをりましたが、貴方は明瞭に、そして同時にずつと

多く又遠くまで見ておいでになる。「所謂る古典的教育⁽³⁾」に關する優れた項には多くの同感者があることでせう。その他の部分では私のやうな老人は、貴方が眩暈することもなく高山の山嶺を歩き廻つてをられるのを見て、少々眩暈を覺えるばかりです。多分谷間には、この大膽な山嶺の散策者の光景にすくなくとも心を奪はれた人々が次第に群がり集つてくることでせう。

貴方の御健康を心からお祈り致します。

貴方の渝ることなく恭順なる

J・ブルクハルト

(1) これはニーチェから贈られた「曙光」への禮狀である。
(2) 第二書一九五。

五

ニーチェからブルクハルトへ⁽¹⁾

(ザール河畔ナウムブルク) 一八八二年八月。

心からの信頼を以て

貴方の

フリードリヒ・ニーチェ

さて私の心から尊敬する友人——と言つて悪ければ、私は貴方をどうお呼びすればよいのでせう——私が今日お送りするものを御好意をもつて御受取り下さい。まへもつて用意された御好意をもつて。と申しますのは、若しも貴方がそのやうになさつて下さらないなら、この書物「悦ばしき知識」について、ただ非難なさる事のみ多いだらうと思ひます。(この書物の内容は全く個人的でありまして、あらゆる個人的なものととも、滑稽なものでもあります。)

ともかく、私は、私が考へるごとく生きる點にまで到達致しました。そして、恐らくはその間に、私の考へるところを實際に表現することを習えたのであります。この點に關しましては、私は貴方の御判斷を一種の判決として承はります。ザンクトゥス・ヤヌアリウス(第四章)をまとめて讀んでいただき度いのです。そして、それが全體として表現されてゐるかどうかを承はり度いと思ひます。

それから私の詩の方はどうでせうか？

追伸。それから、貴方とこのまへお會ひして美しい一日を過ごさせて頂いた時に仰しやつてゐたクルティ氏の住所はどちらでせうか。

(1) 「悦ばしき知識」贈呈の手紙。

六

ブルクハルトからニーチェへ

バーゼル、一八八二年九月十三日。

心から尊敬する友人のニーチェ様

三日前に御著「悦ばしき知識」を拜受致しました。そして、この本が更めて私をどのやうに驚嘆させたか御想

像願へるでせう。第一に韻文で書かれた非常に明るいゲーテ的な音調。こんなのは全く貴方に期待しておらなかったことでもあります。——それから書物全體、そして最後にサンクトゥス・ヤヌアリウス！この最後の章は、貴方が兩國での最近數年間の冬の一つを記念して建てられた特別の記念碑だと見るのは私の誤りでせうか。これは全くそのやうな性格をもつてゐます。

しかし私が何時も繰返し考へずにをられぬのは、あなたが歴史を講義されたならどうだらうといふ問ひであります。結局のところ貴方はつねに歴史を教へておいでであり、この本で多くの驚嘆すべき歴史的鳥瞰を開かれました。私の申すのは、然しながら、貴方が全く専門的に世界史をあなた一流の光で、貴方らしい照明點から照して見られてはどうだらうか、といふことです。現今の一般通念とは逆に、どれ程多くのものがまるで逆立になることでせう。私が相當永いあひだ、我が國では普通になつてゐるジャーナリスチックなものを次第々々に抛棄して、過去のことを、大して御世辭もいはず、かといつて文句もつけずに報告することに満足して來たのはどんなに私にとり有難いか知れません。——その他の點では貴

方のお書きになつた非常に多くのことが、（そして私は最も立派なものまでがさうではないかと心配するのです）私の老いた腦力の範圍を遙に超へてをります。——

然し私のついて行きうところでは、私はこの物凄いいはば壓縮された豊さに對して驚嘆し、清爽の感に打たれます。そして人々が貴方のやうな眼光で物を見ることが出來れば、われわれの學問もどんなによくなることだらうと痛感する次第です。残念ながら私のやうな年令になると、古いものを忘れることなく新しい資料を集め、老いたる馭者として馴れた道を災厄もなく進んで行き、「馬具を外せ」と命ぜられる所まで行き着けば幸とせねばなりません。

急いで讀みとばすのでなく、吟味してこの書物を読むやうになれるまでにはかなりの時間がかかることでせう。貴方の以前の御著作に關してもさうでしたが、貴方が二七四頁§三二五で洩^{（レ）}らしてをられる、或ひは起りうべき暴政の構想には迷はされぬやうにせねばなりません。

心からの挨拶と共に

貴方の常に恭順なる

J・ブルクハルト

ニトチェからブルクハルトへ⁽¹⁾

P・S・クルティ氏の宛名は單に

チューリヒ市

「チューリヒヤー・ポスト紙」編輯者

Dr・クルティ様

です。

(彼は以前フランクフルト紙の共同編輯者をしてゐたことがあり、現在はチューリヒヤー・ポスト紙の社長であり、急進的ですが、彼の黨派からはかなり拘束されない立場にあります。サント・ガレン生れの方です。)

(1) ここでニトチェは、偉人に對して自己に苦惱を課する能力を要請してゐるのであつて、これはブルクハルトの偉人についての考へ *der beglückend Schaffende* とは全く逆である。

七

(ローマ、一八八三年六月)

心から尊敬するブルクハルト教授

結局、今私に缺けてゐるのは、貴方とお話することだけであります！ 私が「私の人生の意義」につき、いくらかはつきり分つて参りましたうへは、「あらゆる人生の意義」についての御高見を承はり度いと心から希望してをります。(私は今は、何よりも「聴手」であります。)しかしこの夏はバーゼルではなくローマに行きたいと思つてをります。

同時にお送りしました小著については、ただ一言だけ次のやうに申し上げます。……各人は何時かは彼の心情を吐露する。そして彼がさうすることにより自分に示す慈善はあまりに大きくて、そのやうなことが他の總ての人の心をどれ程痛切に傷めるか殆ど理解出来ないくらいであります。

私は、今度は以前にもまして貴方の御氣持にそはない

だらうと豫感してはをります。しかし、私に對して常にかはらざる御好意をお持ちくださつた貴方が、今後ますます御好意をお持ちになつて下さるだらうといふことも！

さうではございませんか、私がどれほど貴方を愛し且つ尊敬申上げてゐるか、貴方はよく御存知です。

貴方の

ニーチェ

ローマ、ポルヴェリエラ經由

(ピアノ、二)

(1) 「ツアラツストラ」贈呈の手紙。

八

ブルクハルトからニーチェへ

バーゼル、一八八三年九月十日。

心から尊敬する友人ニーチェ様、

去る金曜日歸宅しまして貴方からの結構な御手紙と御著「ツアラツストラはかく語りき」とを見出ししました。今度の御本は貴方の以前の御勞作とことなり、もはや固定された部分的考察ではなく、人生全體についての響き止むことのない力強い講説であります。しかも一氣にのべられた。この本の到着するところ、ドイツ諸國では或ひは人を驚喜させ、或ひは人を憤激させるといつた工合に、交錯した効果を現はすことでせう。恐らく人を憤激させることなしにはすませますまい。と申しますのは、心から尊敬する友人ニーチェ様、今度の御著では貴方は地上的な人間に非常につらい思ひをお與へなさるでせうから。しかしこの本は、それに憤慨する人々をも惹きつけることをやめないでせう。私自身にとりましては、誰かが頭上遙かなる望樓から叱咤するのを聞くのは全く一種特別な喜びであります。その人が如何なる地平と如何なる谷間とを見てゐようとも。そんな時には、私は自分が生涯どんなに皮相的に流れてゐたかといふこと、又私の比較的勤勉な性格上今後ともさうであるだらうといふことを自覺するのみです。私のやうな^{少し}年令になれば、精々のところだんだん老い込んで弱くなり行くぐらゐで、も

う變るものではありません。

ところでお伺ひ致したいのですが、貴方の御手紙にはローマの日附がついてゐるやうです、——これは或ひは取りあへずただ貴方のローマの御住居すまゐを示してゐるだけなのでせうか。實は、私も八月の十五日から三十一日までローマ（アルベルゴ・ディ・ミラノ）にゐたのであります。私達がお互ひにそんなに近くにをりながらお會ひしなかつたとすれば、あまりの不運ではありませんか。しかしわれわれは人生において、このやうなこともやその他多くの不運を我慢強く耐へるより致し方もないのでせう。

ローマの天候が貴方の御健康に最もよい影響を與へるだらうことを心から祈りつつ、

かはることなき、貴方の常に恭順なる

J・ブルクハルト

九

ニーチエからブルクハルトへ⁽¹⁾

ブルクハルト・ニーチエ往復書簡

シルスマリア、オーベルエンガディン、一八八六年九月二十二日。

尊敬するブルクハルト教授、

こんなに永く貴方とお會ひもせず、御話しもしないでゐるのは、私にとつて苦痛であります。もう貴方とお話ししていけないといふのなら、一體誰と話せばよいのでせう。私の周圍には「沈黙」^{シレンツァイム}が増大してをります。

多分、其の間、C・G・ナウマン氏が私の近著「彼岸」を貴方の御手にお届けしてくれるやうとの依頼を果してくれたことと存じます。どうぞこの本をお讀みください。私のツアラツストラに書いてあることと同じ事を言つてゐるのでありますが。しかし違つた風に、大變違つた風に——私は貴方ほど、そんなに多くの前提を私と共有してゐる方を知りません。貴方は同一の問題を見つめてをられ、同一の問題に同じやうな仕方で骨折つておいでになるやうに私には思はれます。しかも、貴方はより寡言ですから、多分私などより更に強く、また深く。その點、私はまだ若すぎます。文化のあらゆる生長に對する氣味悪い制約、即ち人間の「改善」（或ひは單的に

「教化」(Vernenschlichung)と稱せられるものと、人間なる類型の擴大とのあひだの實に寒心すべき關係、就中あらゆる道德概念と生のあらゆる學問的概念との矛盾——いやもう申すに及びますまい。ここには、私の思ひますには、有難いことに私達が現代及び過去の大多數の人々と共有することの出来ない問題があります。この問題を言明することは、敢てそれを言ふ本人に關してではなく、彼がそれについて話しかける人々の立場から見て考へうるかぎり最も危険な冒険であります。只今のところ、私の大いなる新事實に耳をかす人がないといふことは私の慰めであります、——愛する尊敬する人よ、貴方一人を除いては。そして貴方にとつては、また、こんなことは何ら新事實ではないでせう。——

心からなる

貴方の

Dr. フリートリヒ・ニーチェ

宛名は、「ジェノア、郵便局留置」です。

(I) 「善惡の彼岸」贈呈の手紙。

十

ブルクハルトからニーチェへ

バーゼル、一八八六年九月二十六日。

謹啓

先づ第一に、御送附にあつかりました御高著まさしく頂戴致しました。幾重にも御禮申し上げます。そして御勞作のなかに生きてゐる弛まぬ力に慶賀の意を表する次第であります。

残念ながら、貴方からのこのまへの御手紙が示しておりますやうに、貴方は私の能力を過大に評價してをられます。貴方が取り上げてをられるやうな問題は、私には隨いて行けない、或ひはそのやうな問題の前提をさへ明瞭に把握する能力は全くないのであります。始めから、私は哲學的素質のある人間ではありませんでした。そして哲學の過去からしてが、はや私には疎遠なもの以外の何物でもないであります。多くの學者に對して一三五

買のごとき記述をなさしめた要求の如きは、私には思ひもよらぬことであります。歴史の考察に當つて一般的な精神的事實⁽¹⁾に行きあたつた場合には、私はいつもただほつて置けない必要なことのみを爲し、殘餘はもつとしつかりした權威者の手にまかせて來たのでした。さて、貴方の御著作のなかで私に一番分りやすいのは、歴史的判斷と就中時代への貴方の洞察とであります。即ち、民族のなかに宿つてゐる意志、及び時として現はれるところのその麻痺、危險による教育の願はしさに對し、安逸の大きな保險⁽²⁾とも云ふ如きアンティテーゼ、更には宗教的衝動の破壊者としての機械的勤勉、現代の英雄的人間とその要求、キリスト教の繼承者としてのデモクラシー、殊に地上における未來の强者！ここでは貴方は非常な同感を喚起するに違ひないやうな筆致で未來の發生と生存の條件を書いてをられる。われわれの如きものが時たま現代ヨーロッパ人の一般的運命につきよくやつて見る考察は、それに較べると何ととらはれて見えることでせう！——この本は確に私の老いた頭にはとても手に負へません。そして、貴方の現代思潮の全領域に對する概觀や、個々の問題のニュアンスに富んだ描寫の力と技巧と

を拜見するとき、まるで目が霞んでしまふやうな氣がするのです。

御手紙の端に、貴方の御健康につき一筆お知らせ願へたらよかつたと思ひます。當方、老齡でもあり、歴史の講義はやめ、さしあたり藝術史だけを擔當してをります。

心からなる尊敬の意を表しつつ

貴方の常に恭順なる

J・ブルクハルト

(1) 宗教や哲學思想のことを云つてゐるのだらう。

(2) 現代では何事につけ人の頭が安逸へと向つてゐる。子供を學校へやる場合も、學校へさへやれば將來安樂に暮しが立つだらうといふ考へが先に立つてゐる。かう云ふのを、ブルクハルトは *Assecuranz des Wohlbefindens* と言つてゐるのだ。

十一

ニーチユからブルクハルトへ。

ニース（フランス）

ジュネーヴ館、一八八七年十一月十四日。

敬愛するブルクハルト教授

この秋も貴方に私が心に抱いてゐるものを申し述べることをお許し下さい。それは道徳の系譜のためにといふ題名の道徳史的研究であります。今度も、何時ものやうに多少の不安を感じないではをれないのですが。と申しますのは——私もよくよく承知してゐるのであります——私が食卓に供するあらゆる皿には、非常に多くの固いもの、なかなか消化しにくいものが含まれてをりますので、客人を、殊に貴方のやうな尊敬すべき客人をそんな食卓に招くのは、寧ろ友誼關係、賓客に對する友誼關係の惡用だからであります。われわれは、そんないかもの食ひは行儀よく自分自身だけのことにしてをくべきであり、己だけの齒を危険に晒すに止めるべきでありませう。今度の著書で問題になつてゐるのは、最も困難な心理學的問題でありまして、問題を提出するほうか、それに答へる冒險を敢てするより以上の勇氣を要するくらいであります。もう一度私に耳をおかし下さるでせうか

？……とにかく、この本はこの前お送りした書物（「善惡の彼岸」）と極めて密接な關係にあるものですから、私にはこの論著を貴方にお送りする責任があります。このまへの難澁な書物の主要前提の二三が、今度はもつと明瞭に現はれてゐるといふこともありうる事です。——故なら世間の人は異口同音に申しました、……これは何を問題にしてゐるのか分らない、これはまるで「高級なナンセンス」だ、と。但し、二人の讀者を除きましては。その一人は、尊敬する教授、あなた御自身であり、もう一人は貴方に心から感謝し敬仰してゐるフランス人達の一人であるテームス氏であります。私が、時折心を慰めるために「私は今までにただ二人の讀者を持つたにすぎなかつた。然し、かくも優れた讀者を！」と言つても、お許し下さい。私が今日まで耐へて來ましたところの、非常に内面的であり、又悲慘にもこみ入つた人生は、（そのために、私の根は強健な性格が難破のうき目を見たのであります）遂には遁れやうのない孤立をもたらししました。私の最も喜ばしい慰めは、同様の條件のもとに意氣沮喪することなく耐へとほし、善良な高い志操を保

つことの出来た少數の人達のことを思ひ浮べることであります。尊敬する人よ、私ほど感謝の念をこめて貴方のことを想ひうる人はないのであります。

誠實にしてかはることなき、

貴方の恭順なる

ニーチエ

末筆ながら貴方の御健康をお祈り致します。この冬は殊のほか厳しくなりさうです。おお、貴方がここにゐて下されば!!

十二

ニーチエからブルクハルトへ

シルスーマリア、一八八八年秋。

尊敬するブルクハルト教授

はばかりながら、美學的小論をお目にかけます。これ

ブルクハルト・ニーチエ往復書簡

は私の使命の嚴肅さのただ中で、氣晴しの意味をもつたものであるとはいへ、これはこれとしての眞剣さを持つてゐるものであります。貴方はこの點、この本の輕い反語的な調子に迷はされたりなさることは一瞬たりともないと存じます。恐らく私はこの「ワグナー事件」に關して、一度はつきりと論ずる權利をもつてをります、——恐らくはそれは義務でさへあります。ワグナーの運動は今絶頂にあります。あらゆる音樂家の四分の三は、全く、或ひは半ば彼に信服してをり、サンクト・ペーターズブルクからパリに至るまで、ポローニヤからモンテヴィデオに至るまで、劇場はワグナーの藝術で食つてゐる。最近には若いドイツの皇帝が、ワグナーに關する催しの總てを第一級の國民的行事と稱し、みづから先頭に立つやうな有様です。今や私が鬭争場に現はれることを許されるだけの理由は充分であります。——この書物は、問題の全ヨーロッパ的性格のゆゑにドイツ語ではなくフランス語で書かるべきであつたといふことを告白致します。事實、ある程度までこれはフランス語風に書かれてゐるのであります、とにかく、この本をドイツ語に翻譯するよりフランス語に翻譯する方が容易であります。

せう……。

——近頃の或る日、全市が敬虔の念をこめて、その最高の教育者であり恩人であるひと（ワグナーのこと）に對し感謝の情を示したことは私にかくされてゐる譯ではありません。私は出来る限りへりくだりながらも、敢てかかることに對する私自身の感懷を全市に披瀝する者であります。

大なる愛情と尊敬の意を表しつつ

貴方の

Dr. フリドリヒ・ニーチェ

（十一月の中頃まで、私の宛名は、トリノ市、郵便局氣附です。貴方からの唯の一言が私を幸福にしてくれるでせう。）

十三

ニーチェからブルクハルトへ⁽¹⁾

僕の尊敬に價するヤ・コブ・ブルクハルトへ、それは些細な戯れであつた。そのために僕は世界を創造する退屈を大目に見るのだ。さて、貴方は——君は——われわれの偉大なる、最大なる教師である。何故といつて、私はアリアドネと共にただ萬物の黄金の平衡であらねばならないから。われわれは何事においてもわれわれを超へるものを持つてゐる……

ディ・オニュス

（1）この書簡の消印は、ハテューリン、四・一・八九Vとなつてゐる。發狂直後の手紙である。

（2）ニーチェの頭の中では、神話のアリアドネとゴージマ夫人とが混同してゐたらしい。

十四

ニーチェからブルクハルトへ⁽¹⁾

一八八九年一月六日

愛する教授

つまるところ、僕は神たるより餘程パーゼルの教授で

あり度いのです。然し、そのために世界創造をほつて置くほど、僕の個人主義を發揮することを敢てしなかつたのです。われわれが如何に、また何處で生きやうとも、犠牲を捧げねばならぬことはお分りでせう。——けれども僕は、（僕が、そこでヴィットリオ・エマヌエレとして生れたところの）パラツォ・カリニャーノに向ひ合つてをり、そのうへ僕の足下にガレリア・スプアルピーナで奏でられるすばらしい音楽をその机から聞くことの出来る下宿をとつて置いてあります。僕は下婢に二十五フラン拂ひます、そして僕のお茶と色んな買物を自分でととのへ、破れた長靴に難澁し、それに較べれば人間が充分に單純で靜かだつたとは云へない昔の世界に對して天に感謝することを片時も忘れません。ポストは五歩ばかり行つたところにあります。それで僕は、大衆に偉大なる隨筆記者の腕前を見せるべく、自分で手紙を投函する。僕は、勿論、フィガロとは密接な關係にあります。そして私がどんなに無邪氣でありうるかお判りになるやう、私の最初の悪い機智を二つお聞かせしませう。

ブラード⁽²⁾事件をあまり重大にお考へなさるな。僕がブラードだ、僕は父ブラードでもある。敢ていふが、僕は

又レセップスだ、……僕は、僕の愛するバリー人に一つの新しい概念を與へようと思つたのである、——立派な犯罪者の概念を。僕は又シャンビージュだ——立派な犯罪者だ。

第二の機智。僕は不死の人々に挨拶を送る。ドーデー氏はフランス文藝院のメムバーの一人だ。

僕の謙遜な氣持に逆らつて、不愉快なのは、歴史に現はれるあらゆる名前が結局のところ僕だといふことです。僕が世に送り出した子供についても事情は同じです。だから僕は「神の國」に入り來たる總てが、結局神から出づるのではないかと、少々疑ひの目で思案するのです。この秋には出来るかぎりの輕装で二度僕の墓地へ行きました。最初はロビラント伯⁽⁴⁾として。へーいや僕がカルロ・アルベルトなる限り、あれは僕の息子だ、僕の下級の本性だ。然し、アントネリは僕自身だつた。愛する教授、この築造物をお目に掛けたい。僕は、僕の創り出すものにまるで通曉してゐませんから、如何なる批評も貴方の權限内にある。御批評を利用出来るかどうか約束は出来ないが、有難くは思ひます。われわれ建築家は

頑固なものです。——今日僕はあるオペレッタを——天才的にモール人的なものが——観ました。そしてこの機会に、今はモスコもローマもすばらしいものだといふことを確認して満足しました。御覽なさい。風景に對しても人々は僕の才能を否定しはしません。——美しい美しいおしやべりをしようではありませんか。テューリンは遠くありません。一杯のヴェルトリン酒も工面できるでせう。服裝に關しての身嗜みなどに、こたはらぬやう。

心からの愛情を捧げつつ

貴方の

ニーチェ

(以下は手紙の欄外に後から書きつけられた言葉)

僕は學生服を着てどこへでも出かけ、あちこちで誰かの肩を叩いて言ひます。Siamo contenti? son dio, ho fatto questa caricatura....

明日僕の息子のウムベルトが可愛いマルゲリータと一緒に来る。然し、僕はただ無作法に彼等を迎へる。

残餘はコージマ夫人のために……アリアドネ……時々眩惑される……

僕はカイファス^(c)を索^{つな}がせておいた。僕も昨年ドイツ人の醫者達に、非常に退屈なやり方で磔刑にされた。ヴィルヘルム・ビスマルクと總ての反セム主義者は廢された。

貴方は、この手紙を如何やうに利用されてもよろしい。この手紙はバーゼルの人々の僕への尊敬を落すものでな
5。

(1) 消印は、テューリン、五・一・八九。

(2) Mariano Ignacio Prado (一八二六——一九〇二) ペルーの大統領。ナリとの戦に敗れパリに亡命して、其地で没した。

(3) ニーチェは Chambrige と書いてゐるが Chamberges ならば、フランスの十五世紀から十六世紀に互る建築家の一族。

(4) Carlo Robliant (1826-1885) イタリアの政治家、外務大臣をつとめた。

(5) このやうな人は實在にないらしい。

(6) イエスを尋問したヨーゼフ僧正の純名